

プラトン「ソピステス」における $\Delta Y N A M I \Sigma$: 存在の指標としての

伊東, 斌
九州大学大学院 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/27397>

出版情報 : 哲学論文集. 1, pp.75-95, 1965-10-09. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

プラトン「ソピステス」

における ΔΥΝΑΜΙΣ

—— 存在の指標としての ——

伊 東 斌

対話篇「ソピステス」において、ソフィストを捕える試みが中断させられるのは、存在や非存在に関する問題が解決されずに残されているという事情による。存在に関する問題のうちには存在者(εἶδος)の数に関するものもあるが、存在の基本形式に関する問題もその一つである。この小論はその存在の基本形式をめぐる議論に関するもので、次の順序で求べられる。

問題の所在

δύνάμις の意味

αὐτοῖα における動き

終章

「何か巨人の戦のようなもの」と語られるような仕方において、「存在」(ὄνεια)に関して二つの陣営が鋭く対立する。⁽²⁾

一方の側の人々にとっては、存在するものとは、いわば両手にかかえられる岩やカシの木の如く、触れうるものでなければならぬ。つまり、彼らにとっての「存在」とは、この地上の物体(σεία)に他ならず、それ以外の場所に、それ以外のものを存在として認めることは決してしない。したがって、彼らにとっての存在の指標は「見うる」(ὁρατὸν)ということであり、「触れうる」(αἰσθητὸν)ということである。⁽³⁾

他方、それと相対立する陣営に立った人々にとっては、上に述べたような存在は真の存在ではなく、一種の生成(γένεσις)にすぎず、真の存在とは「可想的で非物質的な形相」(νοητὰ ἀτὰ καὶ ἀσώματα εἶδη)であると主張する。そして、魂が関係するのはこの存在であって、materialistの主張する如き存在ではないと云う。⁽⁴⁾つまり、両者はお互に相手の否定した場所に、否定した性格のものを存在としてたてている。両者の存在の間には何らの共通する点もなく、相対立するばかりである。ただ、両者の態度の間に一つの相違点を見ることは出来る。それは、materialistは、ὁρατὸνでαἰσθητὸνな物質を自らの存在と主張するのみで、その他の性格をもったものを全く否定して問題ともしないのに反して、イデアの友と呼ばれる人々は、materialistの主張する存在を存在としては否定しながらも、自らの存在に下属すべき「生成」としてその存在を認めている点である。しかし、存在として認めていない点ではmaterialistの態度と変りはない。⁽⁵⁾

以上の如く、互いに全く異った考を持って対立する両陣営の各々に対して、エレア出身の客人は対話を通してそれぞれの考を吟味していく。まず最初はmaterialistからである。⁽⁶⁾

materialistにとって存在の指標はὁρατὸν, αἰσθητὸνであった。つまり、この地上において感覚されるものだけが

存、在、す、る、も、の、で、あ、っ、た。それ以外のものは存在するものの範囲に入らなかつた。しかし客人の質問に応じて、生命を持った動物が存在し、そのものが彼らの云う存在するものの範囲に入ること認めなければならなくなる。それらを見ることも、それらに触れることも出来るのだから。ところで、生命を持っているということは魂(ψυχή)を持っているということである。そして、この魂を持っているものを存在者の中に数え入れるということは、その魂のある種の存在者(τὰ τὰν ὄντων)と認めることを含んでいる。魂が何ものでもないならば、彼らにとって、魂をもつと云うことすら出来ないであろうからである。しかし、その存在が認められた魂は、岩や木と同じ性質のものとして存在しているわけではない。見うる、触れうると簡単に云うわけにはいかない。

魂の存在が認められた後に問題となることは、その魂の持つ性質に関することである。何故なら、魂は正しいか不正かのどちらかであり、散知的か無知かのどちらかであるからである。そして魂が正しいのは正義(δικαιοσύνη)を所有することによってか、或いは正義が魂に現存することによってか、どちらかでなければならぬ。そして、この何かに具わったり、或いは去って行くことの出来るものも存在するものであると云われる。何らかの形で存在するのでないかぎり、魂に関係してその性質を規定することは出来ないであろう。正義や叡知やその他そのようなものが存在するものの中に数え入れられたのである。しかし、ここで新たに認められた二種の存在者、すなわち一方は魂、一方は正義・叡知その他の徳、は彼らがそれまでに認めていた存在者とは別の次元に属するものである。彼らが以前に認めていたところでは、存在の指標は ὁπαρῶν であり、ἀπρῶν であつた。しかし、今度新たに認められたものの存在の指標は ὁπαρῶν, ἀπρῶν ということは出来なう。何故なら ὁπαρῶν, ἀπρῶν を存在の指標とする存在者は木や石の段階におけるものであり、存在即物質 (τὰ ὄντα σώματα καὶ οὐσία, 246B) という形で存在しか有していないが、魂や正義その他の徳は即物質と云われうるものではないからである。つまり、materialist のうちで足なみが乱れているわけだが、ある人々は ὁπαρῶν, ἀπρῶν という指標を持たない存在、すなわち、即物質という形では

ない存在を今迄自分達が認めていた存在に付け加えて認めたわけである。

魂や正義その他の徳を存在するものの中に新たに認めたことは、それらを物質の中に引き入れたのではなく、むしろその物質ということを壊して、存在者の中に非物質的なもの (*ἀσώματος*) を導入し、存在の基本形式の枠を拡大し、存在者の範囲を謂わば広げたわけである。存在即物質ではなくなり、物質的なものと非物質的なものが共に存在するものの中に数え入れられた以上、存在の指標としては *ὁρατὸν, ἀκίνητον* では不十分ということになる。したがって、物質的なものも、非物質的なものも共通に持ち、その観点から両者が存在すると云いうるものをあらためて存在の指標として提出しなければならぬ。しかし、*materialist* はそれに対して適当な答を提出することが出来ないで、客人の提案を受け入れざるを得ない。その提案とは、*δυναμικὸν* すなわち力或いは能力こそそれだということである。*δυναμικὸν* —— 本来的に他のものに何かを及ぼす (*κρούειν*) ための力であろうとも、極めて小さなものでも受ける (*παύειν*) 力であろうとも、たとえそれが一回きりのものであろうともその *δυναμικὸν* —— を獲得しているものが全て本當に存在するものである。したがってこの能動的或いは受動的な *δυναμικὸν* が物質的な存在者にも、非物質的な存在者にも共通する指標として認められたわけである。

materialist との関係において認められたこの *δυναμικὸν* による存在規定は、イデアの友によっては自分達の存在を明らかに示すものとしては受け入れられないであろう。何故なら、イデアの友は *materialist* の主張する存在を存在としては認めないからである。もっとも、その際イデアの友が *materialist* として考えているのは客人と対話する以前の *materialist* であり、したがって存在も *ὁρατὸν, ἀκίνητον* で規定される形での存在を考えており、魂や正義その他の徳を一応除外していることは注意しておかねばならない。

さてイデアの友は *materialist* の存在を自らの存在と対比させれば「生成」(*γένεσις*) にすぎないと云う。イデア

の友にとつての存在は常に自己同一を保っているが、*materialist* のそれはその時々それぞれ別様にあるものであり、前者は推理を通して魂でもって共同 (*koinunein*) され、後者は身体でもって知覚を通して共同されると云われる。そしてこの *koinunein* とちぎの *dynamis* を持つということとは、生成に関しては関係が認められるが、存在に関しては認められない。身体と常に変化する物質との間には *noein* や *paidein* の *dynamis* を認め、それが両者の間にある *koinunein* と呼ばれたが、魂と常に自己同一を保つ存在との間には *koinunein* があることを認めながら、それを *dynamis* による関係とは云わない。つまり、イデアの友は、魂が知り、存在が知られるということであつて、両者の間の関係を認めはするが、一方が *noein* で、他方が *paidein* であるというようなことは全く認めない。何故ならば、彼らの解釈によれば、*noein*, *paidein* の *dynamis* はあくまで生成にのみ云われることであつて、存在に関しては決して云われないことだからである。何故なら、何か *paidein* すると、*paidein* するだけそれだけそのものが動かされる (*kinēthai*) ということが含まれているからである。したがつて、存在が認識によつて知られる (＝存在の *paidein*) とそれだけ動かされることになるが、存在は常に自己同一を保つものであつたから、それが動かされるということはあつてはいけないことである。そこで、存在が知られるということがあつてもそれが直ちに *dynamis* による関係とは云えないことになる。これは *dynamis* が生成のみに関係していると云う以上当然の帰結であろう。しかし、存在が知られることによつて動かされないという時には、たしかにその存在が常に自己同一を保っているものであり、又 *Phaedo* 78c⁽⁹⁾ 以下において云われているようなことが意味されていて、それだからこそこの存在は *noein*, *paidein* の *dynamis* を認めることは出来ないと言ふのだが、本当に *dynamis* を適用することは出来ないのか。又、存在は知られうるものであり、*Theaetetus* 156A⁽⁹⁾ 以下における感覚の分析において、感覚器官の外にある対象は、例えば眼とそれの対象の場合、眼とその対象とから出て来たものが中途で出会つて一方は見る眼となり、他方は白色で充たされて白くなる、という説明がなされているが、この説明における見られる対象

と今の知られる存在とをパラレルに考えることは出来ないものであろうか。存在の認識に関する一側面を探ってみよう。先ずイデアの友が自らの存在に適用を拒む *Subaric* から見ていこう。

II

Subaric とは力であり、能力であり、機能である。そして前に見たように能動的な面と受動的な面とを持つ力である。したがって、冷い水を火で熱する場合、火が水を温かくするのは勿論火の *Subaric* であるが、冷い水が火の熱によって温められるのも水の *Subaric* である。この例における火の場合は能動的な *Subaric*、水の場合は受動的ながらやはり水の持つ *Subaric* である。そして Comford の説くところによれば、*Subaric* の語義はこのような日常的な使用方法から発して、医学上の術語として使われていたようである。ⁱⁱ 我々の身体の異常な発熱を下げさせるある物質は解熱剤として使うことが出来る。その物質が木の根であれ、草の実であれ、氷であれ、或いはその他のどんなものであっても、その他に人間に害になるものを含まず、ただ解熱作用のみを有するのであれば、医者はその薬品として使用することが出来る。そしてこの解熱作用がその物質の、医学的見地よりする、*Subaric* である。そしてそれに対応して、我々の身体にはその薬品によって癒されるといふ *Subaric* が考えられる。薬品の癒す *Subaric* と、身体のものであって癒される *Subaric* とがうまく噛み合った時に治療が成功する、と云えよう。そして医者が各々の薬品を他の薬品から区別するのはその薬品の持つ *Subaric* によるのである。下剤と解熱剤は区別される。各々の薬品の持つ *Subaric* が異なるからである。各々の薬品をその持つ *Subaric* によって区別すると同時に、医者は *Subaric* によってその薬品の実質を知ることが出来る。高熱を下げるという *Subaric* を持つが故に解熱剤なのであり、原理的に熱を下げない解熱剤はナンセンスである。してみると、薬品の本質はそれの持つ *Subaric* によって我々に示され、我々にはその *Subaric* によってのみその薬品の本質を知ることが出来る、と云

えよう。

ところで、プラトンの対話篇においては、*δύναμις* はどのように使われているであろうか。存在と関係させて使っていると思われるものを見てみよう。⁽¹²⁾

Laches 192 B

τις οὐσα δύναμις ἢ αὐτὴ ἐν ἡδονῇ καὶ ἐν λύπῃ …… ἐπεὶ τὰ ἀνδρεία κέκληται.

「いかなる同じ能力が快と苦とにあつて、勇氣と呼ばれているのか。」

ここでは *δύναμις* はそれが発動した場合、勇氣として働くある効果の源であり、同時に、あらゆる場合に通じる本性 (*τὸ διὰ πάντων κέφαλος*) として考えられている。

Protagoras 349 B

Ἡ ἐκείτω τῶν νομῶν τούτων ὑπέκεινται τις ἴδιος οὐσία καὶ πᾶν ἔχον ἑαυτοῦ δύναμιν ἑκαστοῦ, οὐκ ἐν οἷον τὸ ἕτερον αὐτῶν τὸ ἕτερον;

「これらひとつひとつの名前のもとには、それぞれ独自のあり方を持った何かが実際に対応していて、それぞれが自己自身の *δύναμις* を持ち、その一つは他と同じ性格のものではないのか。」

一つのものに多くの名前があるのか、それとも一つのものに一つの名前が対応するのか、という問題に関して、*δύναμις* が異なるものは同じ一つのものではないとして、分化の原理としての *δύναμις* が語られている。⁽¹³⁾

Phaedo 97 C

ἢ ἢ βέλτερον αὐτῶν ἕστιν ἢ εἶναι ἢ ἀλλο ὄτιον πλάττειν ἢ ποιεῖν.

「もし誰かがひとつひとつのものについて、いかにして生じたり滅んだり存在したりするかという、その原因を見つけないと思うなら、『問題の事物がいかなる仕方で存在し、あるいはいかなる仕方で他の何らかの働きをなしたり

なされたものがそのものにとって最善であるか、」を発見しなければならない。」
事物の存在の仕方と、どんな仕方でも働きをなすか、或いはなされるかということが同じ次元のこととして語られている。

Republic 436 E

ὄτ ποτέ τι ἂν τὸ αὐτὸ ὂν ἄμα κατὰ τὸ αὐτὸ πρὸς τὸ αὐτὸ τέναυρτα πᾶσαι ἢ καὶ εἷς ἢ καὶ πολύς εἴη.

「『あるものがいつか同一のものでありながら、同一のものにおいて、同一のものとの関係において同時に、反対のことをなされるとか、或はまた反対のものであるとか、或はまた反対のことをなすとかいうこと』を我々は信じはしない。」

魂の三分説の一節である。前例と同様に、なし或いはなされるということある (εἶναι) ということが同じ次元のこととして語られている。我々にとって、ものがある、ということ、そのものが何かをなし或いはなされるということとの間には認識論的に見て、ある種の直接性があるように見える。

Cratylus 393 D

ὥς ἂν ἐκπαρῆς ἢ ἡ οὐσία τοῦ πράγματος δηλούμενη ἐν τῷ ὀνόματι.

「『物の οὐσία が名前において明らかにされて支配的である限りは』ある文字が加えられようと省かれようと問題にはない。」

このことを説明してすぐ次に以下のように語られる。

ἀλλ' ὥς ἂν αὐτοῦ δηλούμενη τὴν δύναμιν ἐπιθώμεν.

「『しかし、その力を明らかにするように附け加える限りは』それを我々に明瞭に示す名前で呼ぶことは正しい。」

この簡処の十分な理解のためには多くのことが語られる必要があるだろうが、当面の問題に関しては、事物の οὐσίαを明らかにすることと、そのものの δύναμιςを明らかにすることが同じこととされ、δύναμιςを明らかにすることによって οὐσίαが明らかになるといふことが示されたことで充分としよう。

Theaetetus 158 E

ὁ αὐτὸς ἐρεῖν ἢ παυτὰπασιν, μὴ πῆ τινα δύναμις τὴν αὐτὴν ἔξει τῶ ἐτέρῳ;

「ものごもし全然異っているとしたら、それが自分より異なるものと何か同じ δύναμιςを持つということとはどっちみちない筈のことではないか。」

つまり、他のものと異なるものが、その点において互に異なるという点に関して、両者が同じ δύναμιςを持つということはない。δύναμιςの相違は本性の相違によって要求されるからである。このことは同じ Theaetetus の次の簡処からも明らかである。

174 B

τί ποτ' ἔστιν ἀνθρώπος καὶ τί τῆ τοιαύτη φύσει παρῆκει διάφορον τῶν ἀλλῶν ποτεῖν ἢ πάσχειν, ἔστι τε καὶ παράματ' ἔχει διερευνώμενος.

(愛智者が)「知ろうと求めて研究に苦心しているのは、むしろそもそも人間とは何であるか、又、この人間の本性に属するものであって、作用を及ぼしたり受けたりする上に於て他のものから区別されるのは何であるか、ということである。」

本性 (φύσει) の区別を明らかにするものは ποτεῖν, πάσχειν すなわち δύναμιςであり、この δύναμιςは本性に所属するものとして本性の特性を形成する。

なお、はっきりにした形で述べられている 156A 以下における ποτεῖν, πάσχειν は今迄の如く οὐσία や φύσις:

に属するものとしてではなく、万有(τὸ πᾶν)の持つ運動の二つの相(εἶδη)として語られている。更に云えば、この ποιεῖν, πάσχειν は単独では存在しない。作用を受ける相手と一緒にならねば作用を及ぼす何かであることはいし、作用を及ぼす相手と落ち合わねば作用を受ける何かであることはいしからである。(157A. B) この ποιεῖν, πάσχειν に関して数種の使い方が Parmenides においてなされている。

Parmenides 136 B

περὶ ὅρου ἄν δει ὑποθῆ ἄς ὄντος καὶ ἄς οὐκ ὄντος καὶ ὄντος ἄλλο πάθος πάσχειντος, ……

「君が常に、存在しているとか、存在していないとか、乃至は何か他の規定を受けると仮定するものについて「…」ここでは存在も非存在も何かにとっての二つの πάθος」として語られており、上の Theaetetus における例とは異なり、πάσχειν なじしは πάθος は大變広い意味において使われている。

139 E

τὸ ταύτων που πέρονθος ὁμοίον

「何らかの点で同一性を受けるものが似ている。」

存在するあるものにとって、同一性も一つの πάθος である。

140 A

εἰ τι πέρονθος χωρὶς τοῦ ἐν εἶναι τὸ ἐν,

「もし一者が一であること以外に何らかの性格を受け入れるとすれば、……」

存在者にとって一性もまた別の πάθος である。⁽¹⁶⁾ 存在と一とは異った別のものであるから、存在が一であるという場合には、存在が存在でありながら、一性という πάθος を πάσχειν したのであり、一性の性格を受け容れたのである。⁽¹⁷⁾ その場合、存在に一性を結びつける一者は能動者であり、一者から一性を受けとる存在は受動者と云ってよい

であろう。ところでこの「アルメニテス」における用例は、*κράσειν* から出て来た *κράθος* に関するものでありながら、今迄の諸例とは異った性格のものであるように見える。これまでの例においては *οὐκία* ないしは *φύσις* との関係で見られた *κοίτιν*, *κράσειν* の *δύναμις* であったが、ここでは *κράθος* は *essentia* との関係で考えられていて、しかもその *κράθος* は *essentia* を知る手懸りとはならぬという性格のものである。

ところで *δύναμις* を考えるうえに忘れてならないものがある。「パイドロス」である。270 C—D において大要次のようなことがソクラテスによって述べられている。

どのようなものにせよ、あるものの本性 (*οὐσία*) について考察する場合には次のようにしなければならない。まず第一にその対象が単一なものか複雑 (多種類) なものかを調べることに、そのものが持っている *δύναμις* をしらべてみることに。すなわち、それは本来能動的には何に對してどのような作用を与え (*κίνησις*)、受動的には何からどのような作用を受けとる (*πάσχειν*) ような性質のものであるかをしらべるのである。またもしその対象が複雑なものあるならば、それを単純なものにばらして、その各々について単一なものの場合に行つたのと同じことを、つまりそのの本来的な *κοίτιν* と *κράσειν* を見なければならぬ。

単純でそれ以上ごまかく分けることの出来ない本性について知るには、それがなすこと或いはなされることによつてしか知ることが出来ない。しかもこれが医学者ヒポクラテスの言葉として身体に關してのみ妥当することではなく、魂に關しても有効だとされていることは、次の恋の定義や、魂の本性に關する箇處と共に興味深い。

Phaedrus 237 C

νεπί ἔρωτος οἴου τ' ἔστι καὶ ἦν ἔχει δύναμιν, ἀναλογία δέμενοι ὄρου, ……

「恋というものについて、それがどのようなものであり、またどのような *δύναμις* を持つものであるかを、お互の同意にもとづいて定義しておき、……」

δει, οὖν πᾶτων ψυχῆς φύσεως περὶ θείας τε καὶ ἀνθρώπινης ἰδιότητας πάθη τε καὶ ἔργα ⁽⁸⁾ πάληθες
νοῆσαι.

「そこでまず最初に、神や人間の魂がどのような状態を経験したり、どのような活動をしたりするかを見て、魂と
 いうものの本性について、その真実をつきとめなければならぬ。」

この二つの例においてもやはり、本性(φύσις)は能動・受動の *δυναμικ* によって知られることが示されている。⁽¹⁹⁾
 なお、ミュートスの形においてはではあるが、245 A 以下において φύσις は完全に *δυναμικ* と置きかえられており、
 「パイドロス」全体に亘って *δυναμικ* は φύσις の代りをしてしていると云ってもよい過ぎではないであろう。

以上、「ソピステス」以前の対話篇における用例からすると、各々のものが他のものと異なるのはそのものの固有の
 本質或いは本性によってであるが、その本質ないし本性が知られるのはそれの持つ *πολεῖν* 或いは *πᾶσχειν* の
δυναμικ によってである。プラトンにとって全ての本質は *πολεῖν* であれ *πᾶσχειν* であれ、それ固有の *δυναμικ*
 を持っており、その *δυναμικ* の相違が本性の相違を示すことになる。したがってある事物を知るための唯一の学的
 方法は「それが何に対してどのような作用を与える力を本来的に持っているか、又それが本来的にどんな作用を受け
 る力を持っているかを探究すること」である。

しかし、以上の諸例における全てを一まとめにして考えることは出来ないことであろう。まず「パルメニデス」の
 例においては問題は、*πᾶθος* と *essenia* であつた。一者が存在の *πᾶθος* を受けて存在するようになったからと
 て、この存在という *πᾶθος* から一者の本性なり特性なりを知ることが不可能である。それに反して薬品の例やその
 他多くの例に明らかであるが、(もしこういふ方が許されるなら)自然学的領域に関するかぎり、*οὐσία* ないし

は φύσις と δύναμις とは交換可能な関係にある。⁽²⁰⁾ 残りは徳との関係における δύναμις である。正義その他の徳には πᾶσιν εἶναι するが、受動的な δύναμις は考えることは出来ない。能動的な δύναμις としての ποιεῖν しか有さない。しかし、その δύναμις を通じて φύσις なり οὐσία なりを知りうる、ということに關しては前者と同じである。

つまり、最初の πᾶσιν と essentia との場合を除いて、後二者においては固有の δύναμις を通じて φύσις なり οὐσία なりを知ることが出来る。後二者においてはそれが出来て、最初の場合にそれが出来ないのは、πᾶσιν ということによって意味されることが後二者の δύναμις の意味するところと少し異って、むしろ偶有性という方向に發展する性格のものだからである。けれども、それもやはり πᾶσιν した πᾶσιν として δύναμις の中に入れられる限り、「ソピステス」における存在の指標としての δύναμις の性格を有することに關しては、他の二つの場合と異なりはしない。このように存在との関係において δύναμις という言葉は既に多く使われており、「ソピステス」のこの箇處において初めて使用されたものではないことは留意しておかねばならない。

ところで、以上より δύναμις は、その一部を除いて、φύσις ないしは οὐσία に置き換えられるものだとということが明らかになった。そしてこの οὐσία は ἀπὸ τοῦ と ὁρατὸν だけによって示される οὐσία のみを指すのではなく、魂の存在を認め、正義その他の徳の存在を認めただうえで語られる οὐσία をも含むことは今迄の説明で明らかである。そしてこれは客人と対話した後 materialist の胸中に生じた考と同じである。それだけではなく、さらにこのことは materialist と反対の側に立つイデアの友にも妥当すると思われる。イデアの友は νοῦτον で ἀσώματος なる相しか οὐσία としては認めないが、この οὐσία は上に挙げた諸例に見られる οὐσία、つまり、δύναμις を通じて知られる οὐσία に含まれており、さらに対話後の materialist が認めた οὐσία にも含まれている。materialist の

ovia とイデアの友の *ovia* が重なる点があるとなると、イデアの友の *ovia* にも *noiev, noxeiv* の *duvatic* による規定が妥当すると考へられまいだろうか。しかし、イデアの友はそれを拒否する。そこで彼らの *ovia* と動きとの関係を見る必要が生じて来る。

III

イデアの友が *duvatic* による存在の規定を受け入れない根拠は前に述べられたが、彼らの前提は存在と生成の峻別、存在と動きとの関係不可能性である。*noiev, noxeiv* の *duvatic* は動きに関して語られるものであり、従って常に静止している存在とは無関係であり、常に動いている生成にこそ語らるべきものである、というのが彼らの云い分であった。⁽²²⁾そこで問題は彼らの云う存在 (*ovia*) と動き (*kinetic*) とは本当に関係ないかということである。

ovia は何かによって知られることは可能である。知の対象となることが出来る。それまでは知られていなかったある *ovia* が、ある時に、ある知性によって知られる、ということとは全ての *ovia* に可能である。その場合、知られていない状態から知られた状態への移行はたしかに性質的変化 (*anaoiev*) であり、とりもなおさず動きである。⁽²³⁾*ovia* には知られるという形での動きが可能である。そしてそれは常に、知られるという受動的な性格を持つ動きであり、能動的な面を持つことのない動きである。そして *ovia* は知られねばならない。全く知られないものについて何かを語ることは不可能だからである。かくて *ovia* には受動的な動きが認められる。

ところで以上の論理的説明がなされたからといって、ここで直ちに *noiev, noxeiv* の *duvatic* に当てはめるわけにはいかない。知られることが受動的な動きである、ということと同時に、知ることが能動的な動きであり、知られるということは知るといふ能動的な動きにとつての受動であるということを示明しなければならぬから

である。また、何よりも先づアイデアの友は知ることが *παρ᾽ ἑαυτοῦ* であり、知られることが *νοεῖν* であるといふことを受け入れないから、このことから証明しなければならぬからである。アイデアの友は *παρ᾽ ἑαυτοῦ* も *νοεῖν* も認めようとはしないのだから、知ることが *νοεῖν* であり、知られることは *παρ᾽ ἑαυτοῦ* だとは云わぬ。

そこで、もし知ることが *νοεῖν* ならば、知られることは *παρ᾽ ἑαυτοῦ* である、という仮定法をたてて、この「もし……ならば」をはずして、知ることが *νοεῖν* であるといふことを証明して、だから知られることは *παρ᾽ ἑαυτοῦ* である、という順序をとる。⁽⁸⁾ 知ることが *νοεῖν* であることが証明されれば、それとの対応において当然知られることは *παρ᾽ ἑαυτοῦ* であるといふことは帰結する。何故なら、前にも云われた如く、*νοεῖν* は *παρ᾽ ἑαυτοῦ* がなければ *νοεῖν* でありえない—— *παρ᾽ ἑαυτοῦ* も *νοεῖν* なしには *παρ᾽ ἑαυτοῦ* であることは出来ないからであり、*νοεῖν* が *νοεῖν* であるかぎりにおいて、そして *νοεῖν* するだけそれだけ *παρ᾽ ἑαυτοῦ* は *παρ᾽ ἑαυτοῦ* であるのだからである。しかし、知ることが *νοεῖν* であるといふようにするには証明をれない。証明に先だつて予め考えられていることに、動くこと (*κινεῖν*) と *νοεῖν*、動かされること (*κινεῖσθαι*) と *παρ᾽ ἑαυτοῦ* の identification といふことがある。このことをはっきり示すのは 248 E 4 である。そこには *ὁ δὲ φάμεν οὐκ εἶναι γένεσθαι περὶ τὸ ἡρέμον* (以上のようなことは静止しているものに関しては生じえないと我々は主張する。) と云われている。この [δ] で云われていることは、*οἷα* はもし知ること—— *νοεῖν*、知られること—— *παρ᾽ ἑαυτοῦ* といふ議論からすると、知られるだけそれだけ *παρ᾽ ἑαυτοῦ* することになり、従つて動かされることになる、⁽⁹⁾ といふことである。そして、静止しているものに関してはそのうことはおこらない、つまり、静止しているものに *παρ᾽ ἑαυτοῦ* を導入することは出来ないといふことを *φαμεν* で断定する。つまりがなせは、動きのあるものには *νοεῖν*, *παρ᾽ ἑαυτοῦ* があり、動きと *νοεῖν*, *παρ᾽ ἑαυτοῦ* とは相伴うものだといふことをこの *φαμεν* は意味している。⁽¹⁰⁾ したがつて、証明も知ることと動くことは不可分であるといふことを立証するところから出発する。

完全な存在者 (παρὲν ἑστί) は動きも生命も魂も叡智も具えてはならず、生きておらず、考へてもいなくて、理性なく、貴く且つ神聖であつて不動のものとして存在していることを我々は認めはしないだろう。また、理性 (νοῦς) はあるが生命はないということも認めない。そしてこの存在者は理性と生命を魂の内に持っている。理性を持ち、生命を持ち、魂を持ちながら、不動 (ἀκίνητος) のものとしてあるということは不可能である。理性はその働きを抜きにしてはその存立を考えることは出来ず、生命を持つということは自分から動くことが出来るということであり、魂は動き(初)の始源 (ἀρχὴ κινήσεως Philr. 245 C) であつたのだから。そこでどうしても動くもの (κινούμενον) と動き (κίνησις) の存立を認めなければならなくなる。(Soph. 248 E—249 B)

ここで明らかにされたことは知る主体の動き、すなわち能動的な動きの存在である。知られる対象の動きに関しては何も述べられていない。しかしそれで充分である。知るということは当然知られる対象を予想する。知られるものなしには知るといふ働きが成り立つことは不可能である。したがつて、知るといふことの動きが認められたということとは、知られるといふことの動きが同時に認められたということである。そして知る主体に認められた動きは能動的なものであつた。能動的な動きの対象は受動的な動きを持つ。したがつて、知られる対象は受動的な動きを持つ。知るものは知られるものなしにはなく、知られるもの知るものなしにはない。そして知るといふことは能動的な動き (κίνησις) になしにはなく、知られるといふことも受動的な動き (κίνησις) になしにはない。ここにおいて κίνησις—νοῦσις¹ 及び κίνησις θαι—κίνησις ʼνοῦσις ʼの identification が働く。すなわち、知るといふことは κίνησις であり、κίνησις は νοῦσις であり、したがつて知るといふことは νοῦσις である。同様に知られるといふことは κίνησις θαι であり、κίνησις θαι は κίνησις であり、したがつて知られるといふことは κίνησις である。

このように証明の順序としては知るといふことを証明して、それに含まれている知られるといふことの証明を果そうとする方法をとっている。知る——νοῦσις が証明されると、それと同時に知られる——κίνησις θαι が証明され

る。だから客人がテアイテトス相手にイデアの友の説を吟味しているこの簡処において、知る主体の存在を認め、それに動きを与えることだけで済むわけである。このことだけのうちに上に説明したことが含まれていることは、それにすぐ続く次の言葉が明らかにする。 *Συμβαίνει δὲ οὐκ ἄθεαίτητος, ἀκινήτων τε ἕντων οὐκ ἠρθεῖν περὶ ἠρθεῖος εἶναι ἠθάμων.* (249B3—4) 「もし存在者が不動ならば、何ものにも、何に関しても、決して理性はないということが帰結する。」これはイデアの友の説を吟味した結論の一部である。意味するところは次の通りである。⁽²⁸⁾

もし全てのものが不動ならば、第一に *κινεῖν* が存在しない。したがって *κινεῖν* も存在しない。そこで知るといふことも存在しない。 *νοῦς ἠρθεῖν* である。すなわち *νοῦς* の所有者の否定になる。次いで、 *κινεῖσθαι* も存在しないし、したがって *κινῆσθαι* も存在しない。だから知られるということも存在しない。 *νοῦς περὶ ἠρθεῖος* ということになる。 *νοῦς* の対象の否定である。第三に、そうなるともはや思惟にとつて実在性における対象も、魂における思惟主体もないことになり、思惟が全くないことになる。 *νοῦς ἠθάμων* である。このようにして知られる対象としての *οὐσία* に動きが認められた。

IV

οὐσία に属する動きは全くの動きではない。何故なら、 *νοῦς* は同型・同状態・同じものに関して、⁽²⁹⁾ ということがないと成立しないからである。常に変化し動くものに関しては *νοῦς* は成立しえない。したがって *νοῦς* の対象としての *οὐσία* は一面ではイデアの友の最初の主張の如く、常に自己同一を保って静止したものでなければならぬ。エレア派の不動性を身につけたものでなければならぬ。そしてその *οὐσία* が知られることによって動かされるわけである。しかし、この動きと不動性は矛盾しはしない。この動きが不動性をこわすことにもならない。動きとはこ

- (2) 246 A — 249 D の部分をここでは取り扱う。両派はどういう人によって構成されるかということはさしあたっての問題ではなす。
- (3) 246 A B、247 B.
この陣営に属す人々は一般に、materialist と呼ばれている。この言葉は適當でない面も持っているが、議論の進行に支障を来さないので、以後この語を使用してこの陣営に属す人々を示すことにする。
- (4) 246 B、248 A
この陣営に属す人々には「イデアの友」(οἱ τῶν εἰδῶν φίλοι, 248 A) と呼ばれる。
- (5) この二つの陣営の間の争いが「巨人戦争」(γίγαντοπόλεμος) に比せられている。手に触れ、眼に見ることの出来るもののみを存在と呼ぶ materialist は、大地から生れ、大地に身を触れているかぎり是不死身の巨人に、他方、眼に見えない世界に存在の在り場所をおくイデアの友は、天上界に住む神々に、それぞれ比せられ、神々と巨人との争いと、イデアの友と materialist との争いとの間アナロジーがおかれている。
- この争いを原型とする存在の基本形式についての議論が、哲学上の重要問題であることは言を俟たない。
- (6) 246 E — 248 A
- (7) cf. Theaetetus 156 A, δυνάμις τὸ μὲν ποιεῖν ἔχειν, τὸ δὲ πᾶσχειν.
- (8) イデアの友との対語は 248 A — 249 D
- (9) 「何であるか」を説明するときの対象となる、もの本質それ自体、「まさに何々であるところのもの」として定式づけられるこの真の存在は、ただ一つの形相を持ち、純粹にそれ自体だけであるものであり以上、つねに同一の状態を保ち、いかなるときにも、いかなる点においても、いかなる仕方においても、けっして何ひとつ変化を受け入れない。と語られている。
- (10) さきの分け方にしたがえば、ここで語られていることは全て γένεσις の世界のことである。尚、眼とその対象は、一方は ποιεῖν し、他方は πᾶσχειν するというのではなく、両方とも ποιεῖν し、両者とも πᾶσχειν する、と語られている。そしてその対象に関する認識は両者の間に生れる、と云われ、知られた時にはその対象はそれ以前とは別のものになっているわけであるが、存在に関する認識においてはこのことはどうなるのであろうか。興味ある問題である。

(11) cf. Cornford, op. cit. p. 235.

(12) Souilhe; Etude sur le terme δυνάμις dans les dialogues de Platon を直接見ることは出来なかった。

Hippocrates: Περὶ ἀρχαίης ἰτρικῆς. 16. ψυχόρτηα δ' ἐγὼ καὶ θεμύρτηα παρ' ἐμὴ ἤκετα τὰ βυ-
ναίω νοίηθ' εὐρατέθειν ἐν τῷ σώματι;

(12) 以下にあげる例は Sophist より前に書かれた対話篇からとられている。Sophist までにどのように変化し、どのように明確化したかを見るためである。尚、本章の以下の部分は *Dias* に負う所大である。

(13) *δυναμικ* の異なるものは、したがって、それぞれ独自のものであり、それら独自のものの各々には各々の名前がある、ということになる。

(14) 註(6)により、この間は「人間とは何であるか。」「人間はどのような機能をもつものか。」という間になる。
νοεῖν・*πᾶσχεῖν* → *δυναμικ* → *νοεῖν*(or *φύειν*) の関係が語られている。

(15) *δυναμικ* は実体的なものから運動へとその所属が移され、*νοεῖν*・*πᾶσχεῖν* は互に相手なしでは存立することも出来ず、「ある」ではなく、完全に「なる」の微表になつてしまつてゐる。一つの極端な形であろう。

(16) cf. Parm. 138A—B, Soph. 245 A—C.

(17) A は A である、という点においては何らの変化もなしに、B であるとうことを受け容れている。identity を保ちながらも一方では他の性格を受け容れている。κοινωνία などと併せ考えて興味深い問題である。

(18) *ἐργα* は *νοεῖν* の効果ないしは結果的側面を示す。

(19) Phdr. 246A において、魂は τὸ αὐτὸ ἑαυτοῦ κινουῦ ἀγέμετον τε καὶ ἀθάνατον、と云われ、245E でも同様のことが云われているが、本文の簡短に従うかきり神的魂も能動と共に受動の可能性があると云える。なお、Soph 247B において ψυχῇに σῶματι を認める人の存在が語られている。

(20) 自然学といふこととてまず思ひ出されるのは「テイマイオス」である。33A, 52E 参照

(21) つまり、この後二者においては、*νοεῖν*・*πᾶσχεῖν* の *δυναμικ* の下に、それを支えるものとして、固有の *δυναμικ* を持つ *φύειν* ないしは *νοεῖν* が考えられている。しかし、*πᾶντα πέι* の信奉者はこれらを支えとして下に置くことはしないであろう。

(22) 存在と動きとの関係不可能性は、存在と生成との峻別を云つた時に既にその中に含まれていることである。存在と生成とを分つものは動きだつたのだから。

(23) Theaet. 181, C, D 以下 *ἀλλοιωσις* と *φωρά* が *κίνησις* の二つの種類と云われている。

cf. Parm. 138B.C.

- ②4 これが客人の議論の進め方である。
- ②5 Soph. 248D—249B
- ②6 cf. Diès, op. cit., p. 44 note 121
- ②7 ミレトス学派以来の伝統である。
- ②8 cf. Diès, op. cit., p. 47
- ②9 249B. τὸ κατὰ ταῦτά καὶ ὑσαύτως καὶ περὶ τὸ αὐτό.
cf. 248A. ἦν(=ὄσιαν) ἀεὶ κατὰ ταῦτά ὑσαύτως ἔχειν.
- ③0 Symp. 211AB において、美それ自身は単一な形相を持つものとして永遠にあるもの、と云われている。
- ③1 他には、ここでは全く触れられなかつた *κοινωνία* の問題がある。その意味ではこの小論は未完である。

(本学大学院博士課程・哲学)